

クロンシュタット市・洲本市姉妹都市提携10周年に寄せて～日露民間外交の可能性～

一高田屋塾定例学習会における講演一 野村 一成

平成23年11月12日

於：洲本市図書館視聴覚室（2F）

本日は、久方ぶりに私の育った故郷で講演する機会を与えていただき感謝しております。洲本で私が講演しますのは、今から8年近く前、2004年1月に母校の洲浜中学の卒業生の一人として、後輩の生徒の皆さんに「世界に目を向けよう！～これからの若者に託す思い～」と題してお話して以来、これで2回目に当たります。私は当時はロシア大使の現役でしたので、休暇を取って洲本を訪ねて、後輩の皆さんが広く世界の動きに目を向けて学んで欲しいということを語りかけました。「世界がどんどんと狭くなっている中で、皆さんが住んでいる社会を考えると、それは洲本であるが同時に洲本に密接につながっている社会として兵庫県があり、関西があり、日本があり、更に世界の多くの国々があるのだということを考えていただきたい、別の言い方をすれば、世界という広がりの中での洲本に住んでいるのだということを考えて、世界の様々な動きに目を向けて欲しい。」ということをお話ししました。

簡単な自己紹介ですが、私は1963年から2006年までいわゆる外交官として43年間勤め、その後、宮内庁東宮大夫を5年3ヶ月勤めて7月初めに退職しました。現在も宮内庁御用掛として非常勤職員の立場にあります。外交官としては、マレーシア、ドイツ、ロシアでの大使を務めました。ロシア関係では、東京の外務本省で合計9年余り、モスクワの日本大使館で三度に亘り合計8年余りを勤めており、合わせますと17年余りに及んでおります。というような経歴からしまして、ロシア関係では今までも日本の方々にお話しする機会が多かったのですが、東宮大夫の職務期間中は話すことは当然のことながら控えてまいりました。この度の退職を機に、退職後に始めてロシア関係のお話しをさせていただく次第です。

私が洲本市・クロンシュタット市姉妹都市10周年の記念で「日露民間外交の可能性」と題して講演をして欲しいとのお話しを伺いましたときに、そのテーマが私がかねてから重要であると考えていたことでありましたので即刻お引き受けしました。

まず、ロシアという国についてであります。最初から言いにくいことに敢えて触れてみます。総理府が戦後の長年に亘って行ってきた世論調査に、どこの国に親しみを抱き、どこの国に抱かないかという項目があります。ロシアは、常に、親しみを抱く国としては北朝鮮と並んで最下位を占め、親しみを抱かない国としてはトップグループに属してきました。何故か？ 色々な要素があると思います。中でも、北方領土問題とシベリア抑留が象徴するような先の戦争におけるソ連の行動とか、強権的で力の信奉者と言われるロシア人に対して抱くマイナスのイメージなどが影響している結果だと思えます。

逆に、ロシア人は日本についてどう思っているかですが、私のロシア人とのつき合いから出てきますことは、まず、日本あるいは日本人に対して親しみと尊敬の念を抱く人が多いということです。日本文化への関心も高く、例えば村上春樹の本のロシア語訳が書店で平積みされて売られており、寿司バーに代表される日本料理店がモスクワだけで400軒もあるとのこと。この辺の双方の間のギャップには説明しがたいものを感じますが、先ほどの総理府の世論調査の質問を変えて、好き嫌いは別として日本にとって重要と考える国はどこですかとの問いかけについてはロシアの位置づけはどうでしょうか？ロシアがトップということはないとしても、好き嫌いを離れて冷静に考えれば、何しろ一番近い隣国の一つであり、プラス、マイナス双方を含めて利害関係が強く、安全保障など総合的に考えても、重要な国であることには疑問の余地がないと思います。

そのような重要な国ロシアとの関係の現状はどうなのかということですが、次のようなことが言えるのではないのでしょうか。

① まず政治面ですが、政府間レベルで両国関係を発展させたいという基本的な姿勢については互いに確認し合うことを首脳会談などの接触の都度に行っており、具体的な進展は殆ど見られておりません。それどころか、こここのところ、領土問題のように政治性の強い事柄を巡っては、日本側から強い反発がないことを見越した上で、大統領を始め政府要人が北方領土を訪問するなど、ロシア側から無神経な対応が繰り返されています。日本側からは、その都度にロシア側に対して強く抗議を行って来ていますが、何もしないで済んで既成事実化してしまうのだけは避ける必要があるからです。相手側が力任せの理不尽な態度をとり、その結果、両国関係がギクシャクすることは、長い日ソ、日露の関係に於いて、ままあったことであり、今回もその一例だと言えます。

② 経済関係は、互惠の立場で実利を求めるということで、それなりに順調に発展しているように思います。APECが来年ウラジオストックで開催されますが、ロシアがアジアに関心を向けてくること自体は結構なことであると思います。日本がそれを手助けするのもよいと思いますが、そのためにリスクを負うことは避けるのが賢明だと思います。この辺は日本の実業界はよくロシアの実情を分かっていると思います。敢えて一言申し上げるとすれば、資源開発の面では、政府と一体となってロシア側に対応する方が無難かつ賢明であると思います。

③ 両国関係において、窓口が大きく開いて発展の可能性があるのが文化・学術・人的交流といった、かつてソ連の時代には発展させたくても困難であった分野であると思います。端的に申しあげて、経費面で途が開かれさえすれば、どんどん大きく発展していくでしょうし、日露両国の政府もそれが故に積極的に取り組もうとしております。

④ このような状況の下で、日本政府として、両国間関係の発展のため、特に困難な領土問題を始めとする政治問題を前進させるためにどうすべきかという点について、一つの方向性を打ち出しております。それは、政治、経済、文化など様々な分野で関係を総合的に発展させることとし、その中で領土など困難な問題をも併せて進展させていく、ということです。要は、国と国との幅広い関係において、政府、民間を問わず、ロシア側と関係を増進できる場合には、それをドンドン進めといくことにより、総合的に良好な関係を作ることにより併せて難しい問題の解決をも目指すということです。裏を返して

申しあげれば、難しい問題が解決されれば、日露関係の飛躍的發展が期待されるので、それを目指すということだと思えます。

このように考えますと、国と国との関係において、日露間の現状では、發展の可能性が最も大きい分野は、先ほど述べましたように、文化、学術、人的交流といった分野であるということになります。交流は、政府間と民間の二つに大きく分けることが出来ます。かつてのソ連の時代には、政府間関係が全体の殆どを占めておりました。ソ連という国の体制の下では、厳密には民間という考え方が外国との関係ではソ連には存在しなかったと言っても過言ではないと思えます。政府間での基本的な合意がないと民間でやれることには限りがありました。この点は文化交流などにおいても同じでありました。私はロシアとの関係では1980年代に、例えば日ソ文化協定の締結のために力を注ぎましたが、何しろ、資本主義社会の文化をソ連国民に晒したくないという基本的な態度がソ連政府の頭にあるものですから、文化協定は出来ても、その内容は極めて限定的でお粗末なものとならざるを得なかったことを思い出します。日本にはロシアとの交流に積極的な立派な方々が多くおられました、皆さんのご苦勞が偲ばれます。私のよく存じ上げております高田嘉七様そのお一人だと思えます。ロシアの時代になって何が大きく変わったかと言うときに、すべからく大きな変化があった中で、私のように長年に亘ってロシア人と関わってきた者から見ると、国と国との関係において民間の果たす役割がとてつもなく大きくなったということでもあります。

以上を申しあげた上で「日露民間外交の可能性」との私の今日の話しの本題に入ることになりますが、一つの具体例に沿って説明します。私が大使を勤めておりましたときですが、2003年を「ロシアにおける日本年」と位置づけて、日本政府が呼びかけて、政府と関係機関のみならず、地方自治体、民間の団体・機関・企業が一体となって、日本を大々的にロシア国民に紹介する事業を計画しました。最初は経済関係も含めてと思ったのですが、まとめることが叶わず、結局、文化面に絞って行うことにしました。「ロシアにおける日本文化フェスティバル 2003」というスローガンの下で、ロゴマークも作って、日本の各地、各方面に参加を呼びかけました。その結果、何と、100をゆうに超える事業・イベントが行われました。その中で、日本外務省、国際交流基金などの政府機関、大使館、総領事館などの在外公館が主催のものが20いくつかでしたが、私が嬉しかったのは、日本の県、市、町などの地方自治体の主催のもの、各地の日ロ協会、様々な団体がイベントを作って参加するもの、NHKとか企業が個別に計画するイベント、などなど、日本各地の民間レベルの参加が大半を占めたことです。政府の声かけと協力の下ではありませんが、これだけの数のイベントが一年の間で行われたことは驚きでありました。広いロシアの中で、もちろん、いざという時には政府の手助けが必要であることから、モスクワとかサンクトペテルブルグなど、日本政府の出先機関が所在する都市でのイベント開催が多かったのですが、それでも、チタ、コルサコフ、ノボシビルスクといった都市でも行われました。こういう企画は、その結果について、すぐに数字などで具

体的に出てくるものではありませんが、外国文化に対して締め付けのあったソ連時代が終わって、新しい国と言ってよいロシアにおいて、この「ロシアにおける日本文化フェスティバル 2003」が日本文化をロシア国民に知らせるといってどれだけの効果をもたらしたか、計り知れないものがあつたと私は確信しております。それと、この機会に、日本において、先ほどの総理府の世論調査の結果にも関わらず、日本の民間の実に多くの皆さんがロシアとの交流に積極的であるということを知ることとなりました。これは私が今まで感じたことのない嬉しい驚きでありました。日本の官民が一体となって、ロシア国民に日本という国を知らせしめる絶大の効果があつたと思っております。私自身も、大使として出来るだけ多くのイベントに顔出しして、イベントの成功に貢献するべく努めました。大使を三カ国で勤めましたが、これほどに忙しかった年はありませんでした。日本の民間のパワーをひしひしと感じて、大使冥利に尽きる一年でもありました。この企画の大きな成功の背景には、新しいロシアになってロシア人がかつての共産党の締め付けを解かれて自由に活動できるようになったことが影響しております。同時に、そのような中では、かつてのように日本の政府機関が主体となって自らイベントを主催するのが主流であるという時代は終わったということでもありました。

この2003年のイベントの後も、私は大使時代に出来るだけ多くの都市を訪ねましたが、どこでも温かい歓迎を受けたことを思い出します。ロシアの政府機関でない色々な方々が私を招いたり、話しかけたりしてくれました。中には戸惑うようなこともありました。一例を述べますと、2005年が日露戦争100周年ということで、いくつかの都市で記念式典が行われました。日本が勝ちロシアが負けた戦争ですから、国家意識の強いロシア人のことですし、まさかと思ったのですが、モスクワでの式典に何と私に日本大使として出席して一言挨拶をして欲しいとの招待が届きました。主催者は全くの民間の組織でして、教会関係者とか日露戦争従軍者の末裔の方々などでした。出席するかどうか随分迷ったのですが、思い切って出てみようかと判断し、出るからにはこっそりとはなくて堂々と出るべしと考えて、日本の記者も含めてプレスにも発表しました。私の出席は日本では報じられなかったようですが、ロシアでは報じられました。さすがに私の発言の内容には注意しました。今までのマレーシア、ドイツでの大使経験を踏まえて、私の持論であります、「我々は過去をよく知り、過去からよく学び、現在を正しく理解し、そしてそれらを踏まえて明るい未来を構築するべく努力しなければならない。」との趣旨で話しかけました。当たり前のことを話したまでと言えどもそれまでですが、案外とこのような簡単で明瞭なメッセージが多くの参加者の賛同を呼んだようでした。これだけ変化したロシア社会に対しては、長い目で見ますと、政府の努力もさることながら、民間レベルでの交流が持つ影響には計り知れない効果が期待できると確信した次第です。

2003年の日本の企画の成功は、ロシア政府にも影響を与えました。ロシア政府は、日本の成功を見習って、2006年に「日本におけるロシア文化フェスティバル」を企画して実施しました。ナルイシュキンという副首相とシュヴィトコイ文化庁長官とが音頭をとって、日本各地で大々的なロシア文化イベントを行いました。そして大成功を収めたことから、日本の場合と違って、この企画を毎年実施することとしております。大変な力の入れようであり、今年で6年間もの間に亘ってロシア文化フェスティバルが行わ

れてきていることとなります。ロシアの場合には、経費面を含めて、政府が多くを負担しているということから、ロシアの民間が主体的に企画立案するという側面は日本よりは薄いと思われます。他方で、ロシアとの交流に積極的な日本の民間の組織を上手く活用しており、また、ポリショイ・サーカスとか著名なオーケストラなどの商業ベースの公演なども積極的に活用しており、ロシア文化の紹介という点では、過去にない成果を収めているように思います。

「ロシアにおける日本文化フェスティバル 2003」において日本の地方自治体の参加も多かったとお話ししましたが、日露間では、政府間ではない交流として、地方自治体単位で交流を行おうとする動きも活発であり、その典型がいわゆる姉妹都市としての提携の動きです。日ソ・日露の交流の歴史の中には、様々な出来事があり、それに地方自治体が関係している場合があります。そのことがきっかけとなって多くの姉妹都市提携が行われてきました。姉妹都市同士の交流はソ連の時代が終わって最も活発に行われた分野の一つではないかと思えます。現在日露間の姉妹都市提携は、県のレベルで9、市あるいは町のレベルで34を数えます。その一つが、高田屋嘉兵衛の業績が基で2001年に当時の五色町（現在は洲本市）とクロンシュタット市（厳密にはサンクトペテルブルグ市クロンシュタット区）との間で結ばれた姉妹都市提携でして、とても素晴らしい交流であると思えます。これまで関係されてこられました多くの方々に深く敬意を表します。

私は大使の立場で任国の都市と日本の都市との間の姉妹都市提携を強く薦めて参りました。ところが、姉妹都市提携と一言で申しましても、それが常に成功裡に実施されているとは限りません。特に、姉妹都市間の交流を継続して行うということから来る資金面での負担が重荷となって交流が疎遠になっている状況が多く見られるとの話を聞きましたし、姉妹都市提携は経費負担の面で日本側の一方的な持ち出しとなるので、提携はしたものの交流を積極的に進めるのには消極的であるとの声も耳にしました。従いまして、実際のところは、無理はせずに、姉妹都市提携の原点を見つめつつ、可能な範囲で交流を進めるということではないかと思えます。その場合に、私の三カ国での大使経験を通じて、いくつかの姉妹都市提携に基づく交流を見てきました立場から、次の二点を指摘させていただきます。

まず第一の点は、姉妹都市提携の基礎となった事柄には色々とある中で、洲本市の場合のように、歴史的な事実に基づいたもので、それが現代的な意義を有している姉妹都市提携は珍しく、日本政府のバックアップも得られ易いので、関係者の皆様におかれては、是非、可能な限りの力を注いで欲しいということです。大事な点ですので少し敷衍させていただきます。洲本市のクロンシュタット区との姉妹提携は、高田屋嘉兵衛の出身地であることを通じてロシアという日本にとって重要な国との歴史的な繋がりに端を発しているという点で、日露間の数多くある姉妹都市提携の中で極めて貴重でユニークなものであります。同時に、この提携は、現在の日露関係を見ますと、単に過去の歴史的な繋がりの原点としての位置づけだけではありません。どういうことかと申しますと、まず、日露両

国間には領土問題を始めいくつかの難しい問題が存在しておりますが、両国が関係を大きく発展させることが両国にとってのみならず、アジア・太平洋地域、ひいては世界の平和と安定のために必要であります。その際に、両国の歴史において、このような立派な先人の交流実績があるということに思いを馳せつつ、両国の関係の更なる発展を目指すということ、そのような視点が重要であると思います。そのためには、出来るだけ多くの日本人、そしてロシア人に、高田屋嘉兵衛とディアナ号艦長ヴァシーリ・ゴロヴニン及び副艦長ピョートル・リコルドとの間の相互理解と友情に満ちた交流について知ってもらいたいということになります。そのような視点からしますと、高田屋嘉兵衛との関係から洲本が有しているロシアとの繋がり の 原点は、現代的な意義を有していると言えるのであり、だからこそ、日本外務省もバックアップしているのだと思います。洲本市におかれましては、是非、高田屋嘉兵衛の出身地であるということ、そしてそこから出発してロシアの都市と姉妹関係にあるということ を 誇りを持って受け止めて欲しいと思います。

ちなみに、先人のロシアとの立派な交流実績ということでは、先日、高田屋顕彰館から送っていただいた資料の中に、1957年の淡路人形浄瑠璃のモスクワ・レニングラード公演についての記録があり、大変に興味深く読ませていただきました。1956年に日ソ国交回復でしたから、その1年後の公演ということで、当時の日本の国内状況などを考えますと、並大抵のことではなかったと思います。公演を立派に終えられた先人の立派な交流実績を誇りに思って然るべきことだと思います。このときに尽力された馬詰優様とは私が在マレーシア大使の時にも親交があり、淡路人形浄瑠璃のマレーシア・オーストラリア公演を実施していただきました。

以上が第一点で、次にこれはロシアに限ったことではないのですが、姉妹都市提携には節目と考えられる年度がありますので、それだけは相手側の協力を得てきちんと交流を行って欲しいということ を 指摘したいと思います。私が大使として出席を求められた式典には、姉妹都市提携の00周年というものがいくつかございました。この点からしますと、姉妹都市10周年記念の行事として、来年に予定されている洲本市からのクロンシュタット区への代表団の派遣は大変に重要なイベントだと思います。是非、成功裡に実施して欲しいと思います。

色々と申しあげましたが、本日の私の講演の呼びかけを行っていただきました、高田屋嘉兵衛翁顕彰会と五色ふるさと振興公社にとりましては、重要なことは、日本政府の協力をも得て、多くの日本の皆様、そして少しでも多くのロシアの方々がこの地を訪ねてこの交流の歴史を知ってもらえるようにすることだと思います。私は、かつて一度、高田屋顕彰館を訪ねたことがあります。その際には時間が無かったので、館の関係者とはお会いできなかったのですが、とても立派な施設であると感心したことを覚えております。私は歴代の在ロシア大使の一人であり、その育った故郷がこの洲本市であるのですから、もっともっとPRを行うべきでした。これを機に更に洲本市の更なるPRに努めたいとい

うことを申しあげて話しを終わらせていただきます。 (了)